



Data

監督: 王瑞 (ワン・ルイ)
 原作: 漠月 (モー・ユエ) 『放羊的女人 (羊を飼う女)』 (宁夏人民出版社刊)
 出演: ジリムトウ/タナ/ゲリルナスン/イリチ/チナリトウ/ハステチゲ

👁️👁️ みどころ

今や経済的にも軍事的にも米国と対抗するようになった中国では、古き良き中国を代表する『初恋のきた道 (我的父親母親)』(99年) や『山の郵便配達 (那山、那人、那狗)』(99年) のような名作は少ない。しかし、内モンゴルは？

内モンゴルを舞台とした名作は『白い馬の季節 (季風中的馬)』(05年) と『トゥヤーの結婚 (図雅的婚事)』(08年) だが、それに続く名作が東京国際映画祭で最優秀芸術貢献賞をゲット！そのテイストは？

私が内モンゴル版“フーテンの寅さん”と名付けた主人公は、草原での羊飼いの生活に満足できず都会にあこがれる日々。妻の価値観とは正反対だが、そんな若夫婦は内モンゴルの大地と白い雲の中で、如何に生きていくの？素朴で懐かしい中国映画を、本作でしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■舞台は内モンゴル！あの“2つの名作”に続いて本作が■□■

島国日本にとって、中国大陸は途方もなく大きく広い。そんな中国大陸では、上海や北京は日本人によく知られているが、例えば山西省の大同は誰も知らない地方都市だ。改革開放政策が進み、若者の感覚も激変していた2001年当時のそんな大同を舞台に、揺れ動く19歳の男女を主人公として描いた話題作が、贾樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督の『青の稲妻』(02年) だった (『シネマ5』343頁)。同作で、ちょっと変わり者(?) の「モンゴル大酒」のキャンペーンガールを演じていた美人女優、趙涛 (チャオチャオ) は、その後もジャ・ジャンクー監督の“ミュージズ”として大活躍を続けているし、以降ずっと続いているジャ・ジャンクー監督の活躍ぶりもすごい。私が同作を見たのは2004年6月30日だったが、当時は大同を知るだけでビックリ。それより更に奥地にある内モンゴル

までは、とても、とても・・・。

他方、大気と水を中心とする中国の環境問題は深刻だが、“モンゴル草原の砂漠化”という、それ以上に深刻な問題があるのを知ったのは、『白い馬の季節（季風中の馬）』（05年）（『シネマ17』375頁）を観た時だ。大同の若者は『任逍遥』を歌い、アメリカばりの反体制（？）を気取りながら各自の進路を模索していたが、草原を失ったモンゴルの遊牧民は一体どこへ？そんな問題提起作たる同作を監督、脚本した他、自ら主演したのが、モンゴル族の大型新人、寧才（ニン・ツァイ）だった。同作では草原の喪失と砂漠化が問題提起される中、タイトルとされている“白い馬”が何を象徴するのかが大きなテーマだった。

さらにもう一つ、内モンゴル自治区の砂漠化、水不足、貧しさの中、美人女優、余男（ユ－ナン）演じる女性、トゥヤーの離婚と再婚という“かぐや姫レース（？）”を面白く描いた、王全安（ワン・チュアンアン）監督の『トゥヤーの結婚（図画的婚事）』（08年）（『シネマ17』379頁）も興味深かった。同作は張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅いコーリャン（紅高粱）』（87年）に続いて、19年ぶりにベルリン国際映画祭の金熊賞を中国にもたらしたが、山西省の大同以上の水不足に悩む内モンゴルの草原では、水汲みの大変さと井戸掘りの重要性を改めて確認させられることになった。

しかして、原題を『白云之下』、邦題を『大地と白い雲』とした本作は、これら“2つの名作”に続く内モンゴルを舞台とした名作だから、興味津々、そして必見！

■東京国際映画祭で上映！最優秀芸術貢献賞をゲット！■

大阪で毎年3月に開催される「大阪アジア映画祭」では、当然中国映画がたくさん上映される。しかし、2019年1月に開催された第32回東京国際映画祭で中国映画の本作が上映されたのはなぜ？私は、その事情や背景を全然知らないが、その時の英題の『Chaogtu with Sarula』と同じ、『チャクトウとサルラ』だったらいい。中国映画に詳しい私ですらこの映画の存在を知らなかったのだから、モンゴル語をメインにした本作を東京国際映画祭で上映しても、観客を集められるの？そんな心配もあるが、結果は上々で、何と本作はコンペティション部門最優秀芸術貢献賞をゲットしたというからすごい。チラシによると本作は更に、第23回上海国際映画祭一路映画週間オープニング作品とされ、第33回金鶏獎最優秀監督賞を受賞しているから、当然その内容が素晴らしかったのだろう。

日本人が一番好きな中国映画は、張藝謀監督の『初恋のきた道（我的父親母親）』（00年）（『シネマ5』194頁）と、霍建起（フォ・ジェンチイ）監督の『山の郵便配達（那山、那人、那狗）』（99年）（『シネマ5』216頁）の2本。それは、日本が高度経済成長によって豊かになっていく過程の中で失ってしまった自然や素朴さが両作品で顕著なため、日本人はこの両作品に“ある種の懐かしさ”を感じるためだ。しかし、今や中国はGDPでは日本をはるかに追い越し、米国に迫る成長を続けている上、軍事力でも、“米国に

追いつけ追い越せ”という状況になっている。ところが、そんな中国は他方で失ったものも多い。しかし、内モンゴル自治区は？

北京電影学院の教授である王瑞(ワン・ルイ)監督はモンゴル族ではなく漢民族だが、モンゴルの草原が大好きで、漢月(モー・ユエ)の原作『放羊の女人(羊飼いの女)』を読んで、「美しい草原をこの物語で撮りたい、いや、撮るべきだ」と感じたそうだ。なるほど、なるほど。本作が東京国際映画祭で最優秀芸術貢献賞を受賞したのは、きっとそんな本作の素朴さが今の日本人に率直に認められたためだ。

■□■この男は内モンゴル版“フーテンの寅さん”？■□■

①デビュー作の『一瞬の夢』(97年)、『シネマ34』257頁) ②第2作の『プラットホーム』(00年)、『シネマ34』260頁) で注目される中で、第3作『青の稲妻』を発表したジャ・ジャンクー監督は、同作で19歳の主人公たちの感覚を真正面から問題提起しながら、そこに37歳のヤクザ男の感覚も絡めていった。その後のジャ・ジャンクー監督作品には、『四川のうた(二十四城記)』(08年)、『シネマ34』264頁)、『罪の手ざわり(天注定)』(13年)、『シネマ34』269頁)、『山河ノスタルジア(山河故人)』(15年)、『シネマ44』246頁)、『帰れない二人(江湖儿女)』(18年)、『シネマ45』273頁) 等があるが、これらはすべて、それぞれその時代状況の中での鋭い社会問題提起を含んでいる。それらのすべてにジャ・ジャンクー監督のミュージズ・趙濤(チャオ・タオ)が登場しているのは嬉しいし、それぞれの作品の主人公のキャラが、少しはぐれ者気味であること(?)も興味深い。たとえば、『帰れない二人(江湖儿女)』に登場する主人公はカッコいい渡世人だが、これぞ国や時代は違えど、まさに、ジャ・ジャンクー監督版の“フーテンの寅さん”？

そう考えると、本作の主人公・チョクト(ジリムトゥ)は、私の理解するところでは、まさに“内モンゴル版のフーテンの寅さん”だ。フーテンの寅さんは昭和を代表するキャラクターだが、ワン・ルイ監督が本作で描く主人公・チョクトは、当然2019年当時の内モンゴルの時代状況を前提としたもの。したがって、チョクトの祖先たちは白い雲と広い草原の中で育ったものの、馬に代わってバイクや車が移動手段となり、草原の向こうでは急速な都市化が進む今の時代の内モンゴルに生きる若者・チョクトはいつも都会に憧れているらしい。しかし、もしチョクトが都会に出て行くと、草原で羊を飼育することで成り立っているチョクトと愛妻・サロール(タナ)との生活はどうなるの？

■□■妻の価値観は正反対！すると、この夫婦は・・・？■□■

『男はつらいよ』シリーズでは、どの映画でも、その冒頭に見る“フーテンの寅さん”は故郷の葛飾柴又ではなく、旅先にいた。それに対して、チョクトは草原の中で羊を飼い、ゲルの中で愛妻のサロールと仲良く暮らしている立場だ。ところが、本作冒頭は、チョクトが羊の群れとおんぼろトラックを交換し、いずこかに旅立っていくシークエンスだから、アレレ。まさに、この男はモンゴル版“フーテンの寅さん”！？妻のサロールにしてみれ

ば、ある日突然夫が待てど暮らせど帰ってこない状態になったのだから、そりゃ大変だ。日々の羊の世話はどうするの？とりあえず、サロールはバイクに乗ってチョクトを探し回ったが、チョクトがいつもつるんでいる友人（イリチ）に聞いても「知らない」との返事。また、「チョクトから小包が来ているよ」と小包を届けてくれた郵便配達員に聞いても、チョクトの居所は知らないようだから、アレレ。

『男はつらいよ』シリーズにおける寅さんの妹のさくらは、町工場で働く博と結婚して葛飾柴又に定着していたが、フーテンの寅さんはそこに定着できず、旅ばかり。どうも本作のチョクトもそんな感じらしい。そんなチョクトに対して、妻のサロールは大草原の中で羊を飼い、その乳を搾り、ゲルの中で生活するのが当然と考えていたから、2人の価値観は正反対だ。その食い違いは大きい。すると、この夫婦は・・・？

■妻の愛し方は？馬術は？カラオケは？生活能力は？■

“フーテンの寅さん”は生涯独身だったが、今一步というところまで進展していたのが、浅丘ルリ子演じるリリーさんとの結婚。さくらと博の強力な後押しもあったし、リリーもその気十分だったが、ちょっとしたタイミングが合わなかったため、残念ながら・・・。このように、“フーテンの寅さん”は恋愛については不器用の極みだったが、本作を観ていると、チョクトはサロールを心から愛していることがわかる。また、異なる価値観の中でも、精いっぱい妻の言うことを聞き、仲良くやっつけていけるように努力していることが分かるから、本作ではそこらあたりをしっかりと！

また、ハリウッドの西部劇では、馬の乗りまわしがカウボーイたちの腕の見せ所だが、チンギス・ハンの血を引くモンゴル族のチョクトだって、それは負けてはいない。その馬術は相当なものだ。また、面白いのは、モンゴルの大草原で暮らす若者たちがカラオケに行こうと思えば一泊泊まりで行かざるを得ないこと。大草原の上でのパーティーも楽しそうだが、やはり若者には都会のキラキラ輝くネオンが魅力だし、豪華な部屋の中で仲間たちと酒を酌み交わしながら好きな歌を好きなように歌うのが楽しいらしい。もともと、チョクトや友人達のそこの酒の飲み方は尋常ではないから、ヤバいことが起こらなければいいのだが・・・。

他方、モンゴルの草原での生活に今やバイクや車が入り込み、携帯も定着しているが、チョクトの生活能力は？生活能力ゼロの“フーテンの寅さん”に比べればチョクトはまだまし（？）だが、大地に根を張って生活しているサロールに比べれば、やはりその“フーテンぶり”が目立つ。しかして、本作中盤、羊を15頭売って車を買おうと決めたチョクトの行動を巡って、ある大事件が勃発するのでそれに注目！その事件の中でお腹の子を失ってしまったサロールは、「あなたと結婚した時、つぼみが花開くような気持だった。けれど、今は根まで枯れてしまった。子供を失ってしまった。身籠っている羊を大切に」と言うまでになってしまったが・・・。

■□■反省の日々は？スカイプの効用は？伯父の帰国は？■□■

チョクトがサロールを深く愛していることは間違いない。しかし、出血多量で危うい状態だったサロールを何とか病院に運び込んだチョクトが妻の妊娠を知らなかったことに、女医さんはビックリ。そんなチョクトは今、都会への夢を断ち切り、羊の世話に明け暮れる反省の日々だ。もっとも、反省だけならサルでもできるから、そんなチョクトを見ている、夫婦の仲が戻るとは到底思えない。しかし、この2人は価値観が違うだけで、仲が悪いわけでもないし、愛し合っていないわけでもない。そんなこともあって、ある日チョクトがサロールにスマホをプレゼントし、スカイプ機能を使って互いに話してみると・・・。驚いたことに、これを使うと、普段面と向かって言えないことが何でも言えることにビックリ。これなら、「君を愛している」とでも、「死ぬまで君を離さないぞ」とでも、何なりと・・・。

他方、本作の後半、少し物語が転調するのは、北京に行った伯父さんが帰国してきたこと。一緒に戻った奥さんは北京の人だから、モンゴル語は全くわからない。したがって、この2人がこれからモンゴルで生活するのは大変だろうが、伯父さんは「自分の母親は、呼んでも決して北京に来ることはなかった。ここを離れたくない。この年になると、母親の気持ちがわかる」としみじみと語っていた。なるほど、時代が流れ、世の中が変わっていく中、人それぞれの生活スタイルがあるものだ。もっとも、今は反省し、草原の中で羊と共に暮らす生活に徹しているチョクトだが、そんな伯父さんの話を聞いてもやっぱり都会への憧れは変わらないらしい。世の中はこんなに広いのに、草原から出られない。いつまでたっても囲いの中だ。それは一体なぜ？

■□■都会でのチョクトの定職は？夫婦の再生は？■□■

チョクトは都会で暮らしたい。それに対して、サロールはこの草原から出たくない。この価値観の違いは大きいから、永久にこの2人が交わることはない。そう思わざるを得ないが、本作ラスト、チョクトは都会に行き、運転手の仕事（定職）に就いていたから、アレ・・・。そこでチョクトは、勝手気ままとは言えないまでも、ある程度外の生活をする事ができているようだ。そして、サロールは再び妊娠し、子供も生まれているようだ。まとまった収入を得たチョクトは、たくさんの土産物を手にゲルに戻っていたから、これにてこの夫婦の再生は完了。

そう思っていたが、ある日チョクトがゲルに戻ると、サロールはいない。必死でサロールを探すチョクトに対して、近所の人は、「サロールは街のお姉さんの家に行ったよ。ここで冬に1人で羊と子供を育てるのはムリだからね」とバツサリ・・・。内モンゴルの大草原は豊かな時は美しいが、寒くなり、雪が積もる時期は大変。さあ、そんな「大地と白い雲」の中での、この夫婦のホントの再生は？本作の結末は如何に？それは、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年5月12日記